

これが私の指導法 ～知的財産の継承～



常盤小学校

教諭

納谷 宜直

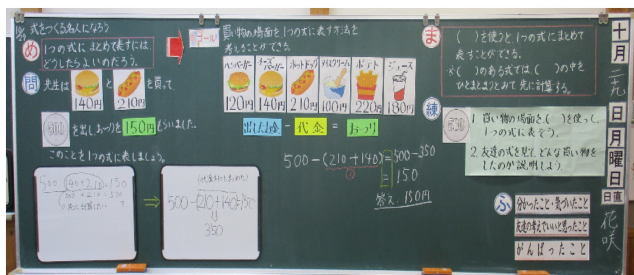
今から三十年前、ちょうど昭和から平成にかわった年、私は淳城第二小学校の「ことばの教室」に赴任しました。その年のPTA会報に座右の銘を載せること

になり、私は「一視同仁」と書きましました。特別支援に携わる最初の決意として選択したと記憶しています。それ以来、子どもとの出会いを大切に、指導要録や引き継ぎの記録を心に留めながらも、白紙の状態でもどもをみることを念頭においてきました。

さて、私が普段の授業で心がけていることは、スタートラインをそろえるということです。これは、ユニバーサルデザインの考え方にもつながると思います。具体的には課題の意味を全員が理解できるように工夫し、ゴールを目指すということです。例えば、問題文を簡潔に表すためにイラストや図を用いることが考えられます。また、学習に見通し

をもたせるために、板書とノートを一括化させることも有効です。

気になる子が増えているように感じますが、特別支援での経験を通常学級でも生かすことができないうか、試行錯誤の続く毎日です。



能代東中学校

教諭 畠山 香織

「三つの場」の 実践を通して

本校の学校教育目標の具現化を図るための、学びにおける「三つの場」について紹介したい。

まずは、課題解決や合意形成を図るための「つながる場」。そして、精選された課題に合致する最適解を確認す

る「確かめる場」。さらには、学びを、教科横断的に、「自ら」に生かすための振り返りとしての「生かす場」である。

例えば、話し合いでは、コーディネーターに徹し、構造的な板書で全体の話合いや個々の思考の流れを支えること。一時間の授業の流れを「見える化」することや、自他の考えを比較することや考えの深化を図るよう促すのも主体的な学びを支える支援の一つである。

集団で学ぶことの意義は、他の考えに触れることで新たな気付きが生まれ自身かより良く変容することや考えるその学びの足下を確実に照らし導けるよう、職員一丸となって研鑽に励んで

いる。

Google社のエリック・シュミット会長は「『いいね』とホタンをクリックするのではなく、『いいね』と口に出して伝えるよう」と言った。移り変わりの激しい時代だからこそ、よさを認め、「つながる」姿勢を大切に育んでいきたい。



淳城南小学校

教頭 近藤 詮

「確かな発問が 授業を変える」

児童がその気になる声かけをして進めている二戸先生の国語の授業風景です。



編集後記

今年度、早くも3回目の発行となった「教育のしろ」。執筆者の皆様のご原稿提出の早さに、毎回、感謝しております。今年度にも、すばらしい実践や今年度で退職される方々の思いがぎゅっしりつまっています。何かと慌ただしい年末になりましたが、どうぞ「一読ください」では皆様、よいお年を。(O)